第１回青森県生涯学習審議会　会議概要

日時	平成３０年１２月１８日（火）　１３：３０～１５：００
場所	青森県庁東棟　４階Ｄ会議室
出席者	《 委 員 》敬称略　１５名 清水目　明美　　中村　まり子　　長岡　俊成　　米田　大吉　　小枝　美知子 吉川　康久　　永澤　正己　　石橋　伸之　　工藤　貴子　　柏谷　　至 松本　　大　　廣森　直子　　山﨑　結子　　伏見　憲子　　岩本　美和 《青森県教育委員会教育長》　和嶋　延寿 《 事務局 》　４名 渡部　靖之（生涯学習課長） 宮野　孝晶（生涯学習課　企画振興グループ　主任社会教育主事）他２名 《 その他 》　３名 伊藤　明徳（学校教育課課長代理） 山本　洋史（総合社会教育センター教育活動支援課副課長） 三浦　博明（生涯学習課　地域連携推進グループ　主任社会教育主事）
内容	１　開　会 ２　教育長挨拶 ３　会長、副会長選出 ４　県教育委員会からの諮問について ５　青森県生涯学習審議会について ６　案　件　（１）諮問内容について （２）その他 ７　閉　会
配付資料	次第 青森県生涯学習審議会委員名簿 座席図 資料１　青森県生涯学習審議会設置条例 資料２　青森県生涯学習審議会について 資料３　諮問書 資料４　青森県生涯学習審議会・青森県社会教育委員の会議スケジュール 〈参考資料〉 １　青森県基本計画「選ばれる青森」への挑戦（抜粋） ２　第３期教育振興基本計画（概要） ３　第１３期青森県生涯学習審議会報告

会　議　の　内　容

１　開　会

（内容省略）

２　教 育 長 挨 拶

（内容省略）

３　会 長 、副 会 長 選 出

事務局より、互選により会長、副会長を選出することを説明。

委員より、事務局案を求められたため、事務局案として柏谷至委員を会長に、松本大委員を副会長にしてはどうかと提案し、全委員の賛同を得て選出された。
【第１４期青森県生涯学習審議会】
会　長：柏谷　　至（青森大学社会学部　教授）
副会長：松本　　大（弘前大学教育学部　准教授）

４　県 教 育 委 員 会 か ら の 諮 問 に つ い て

和嶋教育長が、諮問事項を読み上げ、柏谷会長へ諮問書を渡す。

５　青 森 県 生 涯 学 習 審 議 会 に つ い て

事務局より、青森県生涯学習審議会について説明。

案件１（１）審 議 テ ー マ に つ い て

会長　これからの審議テーマについて、審議会の諮問について事務局より説明をいただきたい。

事務局より、諮問書について説明。

会長　事務局の説明に対して意見を伺いたい。

○　重点審議事項１の「若者」とはどのような年齢を事務局では想定しているのか。

事務局　基本は高校生も含めた３０代前半までを想定している。一般的に「青少年」とは３５歳くらいまでをいうことが多いが、あまり年齢を限定せずに考えていただきたい。高校生をどのように扱うのかを今後検討していく必要がある。

会長　それでは、各委員一人ひとりから自己紹介と諮問書に対する御意見をお話しいただきたい。

○　今回、生涯学習に係わるのは初めての経験である。違う職種の方々と知り合うことができ、とても嬉しく思っている。資料３の重点審議事項１の課題に「地域の伝統行事等の担い手が減少する中、次代の地域を担う若者や高校生の育成が急務」とあり、これは私の職場がある地域に当てはまる。昨年より人口減少、超高齢化社会の中で地域を活性化させるために何が必要かを考えてきた。保護者や地域の方々には、教育の根幹は「家庭」であることを常々申し上げている。家庭で保護者が子どもと一緒に図書館へ行くなど、係わっていくことが必要である。家庭が「学習場所」になればよい。保護者から係わってもらった子どもが成人し、保護者になり、家庭での教育力が高まることで地域が活性化し、地域を守っていくことができると思う。

○　重点審議事項１で、「地域の大人が「伴奏者」として活動を支援することが必要とされています。」とある。言葉としてはいいかもしれないが、高校生や大学生に地域づくりを任せきりにするのでは、あまりうまくいかないと思う。高校生や大学生は当事者ではない。当事者はそこに住んでいる地域の住民であり、生活者である。大学生に手伝ってもらうことはよいことだが、大学生に全て任せるべきではない。重点審議事項３に関係することで、青森県の大学生の数は今後、急激に減っていくことが予想される。全国と比べても、青森県は小中学生の人口が急激に減少しているためである。学校の先生方にお願いしたいことは、児童・生徒を地域の中に開放することである。地域の大人を信用し、学校の先生だけで子どもに対する責任を負うのではなく、地域にも子どもに対する責任を分担させてもらえればと思う。他の地域が実践している方法をそのまま模倣するのはできるだけやめた方がいい。

○　重点審議事項３をみると、将来に期待していることの現れなのかなと思う。諮問書の言葉に意図が組み込まれていると思う。「つながりづくり」などの単語もそうである。会議の後に諮問書を熟読し、理解を深めたい。

○　PTA 活動にこれまで１０年ほど係わっている。私は、初めて生涯学習に携わるので、この２年間は学びながら活動していきたい。基本計画の中の「青森を愛し」という文言がとてもよいと思う。

○　社会福祉学科で社会福祉学や教養の分野の講義を担当している。専門職の養成をしていることもあり、県内の就職率があまり良くないことを外部から指摘されることがある。専門職として生活していくことを考えた時に、就職活動から県内と県外の就職条件を比べると、県内の職場が選ばれない状況であることがある。若者を活用しようと考えていることが若者にうまく伝わらない。県内の労働条件の改善も必要である。青森県には地域の良さがあると思う。

○　学校の PTA 役員や地域と学校をつなぐ「地域コーディネーター」として活動している。また食育インストラクターとして 10 年活動している。昨年まで市の生涯学習課と協力して開催していた「親子料理教室」において、地域の方々が参加することで、地域の人同士、子ども同士のつながりが生まれ、新しいコミュニティが生まれると感じている。現在、高校にボランティア部が存在するそう。高校生が社会体験をしたいと考えたときに、ボランティアについて情報収集する場所や機会があれば、もっと高校生が地域活動に参加できると思う。

○　放課後子ども教室、学校支援コーディネーターをしている。各機関の様々な方と知り合いながら、２年間頑張りたい。

○　Ｉターンで３０歳をすぎた頃から青森で生活している。青森に来て特に感じたのは「子どもは親の背中を見て育つ」ことである。親が楽しんで学ばないと子どもも学ばないと思う。親の世代こそ「死ぬまで勉強」だという姿勢で、「学ぶことが楽しい」と親自身が思うことが大事である。

○　PTA の責任者をしている。現在は「青森家庭教育アドバイザー」として活動している。「家庭教育十箇条」を基に、青森県教育委員会主催の「親楽プログラム」では、親が気づき、学ぶための講座を開いている。これまでの皆様の話から、「親」がキーワードとして挙げられている。やはり、親の学びが大事であることを感じている。最近は、地域学校協働活動としてコミュニティスクールの実施を始めているところである。地域の方々と活動する機会が増えてきている。この間、地元の中学生と地域住民が話し合う場があったが、年配の方々の意識と子どもたちの意識がうまくかみ合わないと感じた。重点審議事項１の課題にある「協働できるコーディネーターの養成」が必要である。年配の方々が行ってきた今までの活動を活かしながら若者とどのように噛み合わせていけばよいかを考えている。

○　働き方改革が国から言われており、中央教育審議会答申では、「学校と社会がつながること」が大きく取り上げられている。「学校の学びが社会で通用するのか」「社会は一体、何をするのだ」という問いかけがあるのではないか。生涯学習の側面から何ができるのかと考えている。私が住んでいる地域では人口減少が課題である。人口減少における地域づくりをどのように進めていくのか、まさに喫緊の課題である。このまま何も対策をしないと、どうにもならないため、何とかしないといけないと感じている。具体的な方策を審議したいと思っている。

○　普段は、日本全国や世界へ私が住んでいる地域の魅力を情報発信している。私が子どもの頃は、地元の子ども会があり、近所の高齢者と様々なイベントがあって楽しかった記憶がある。「地域のコミュニティ」が大事であると思う。私が主催しているイベントの参加者は核家族が多いため、普段から高齢者と触れあう機会が少ないと感じている。地元の高齢者が昔遊んでいた手遊びなどを子どもたちに経験していただくためにイベントを企画したことがある。このあたりをヒントに何かできればいいと思っている。

○　８年前にＵターンで青森に戻り、森の中にコミュニティカフェを仲間たちとオープンさせ、生涯学習につながるイベントや自然体験、職業体験などを企画している。重点審議事項の課題の「地域の伝統行事の担い手が減少している」という文言が大変気になる。以前、地元の神社のお祭りで３００年祭ということで、若手が何か企画したいということがあった。地域住民が祭りに係わる機会をつくりたいと地域の若者が思っていたため、活動に必要な資金集めのお手伝いをさせていただいた。様々な成果はあったが、地域住民が係わる機会をつくりたいという意識が高い若者と今まで祭りに係わってきた若者との間で意見が食い違うことが多かった。地元の祭りが無くなることで地域コミュニティが破壊されていくと感じる。人口減少が進む中で今まで通りの祭りの方法では持続できないと思う。どのようにして大人が「地域の伴走者」となる

ことができるか。地域の祭りを持続し、発展させていくことができるのかを地域全体で考えていかなければならない。地域社会は衰退の一途を辿ってしまう。私の様々な経験についてこれからも情報提供ができればいいと思う。

○　以前、教育事務所の主任社会教育主事として社会教育に係わっていた。私が勤務している学校は児童数がとても少ない学校である。小規模の学校だからこそできることがあると思い、児童にはできるだけ様々な体験・経験をさせるようにしてきた。子どもたちに様々な経験をさせることで成長を促していきたい。体験活動を通して子どもたちが、自分のふるさとを愛する気持ちを育てたいと思っている。先生方にはぜひ、社会教育に係わっていただきたいと思っている。重点審議事項３の体験活動については、いくつか事例も知っているので、御協力できるかなと思う。

○　前期から引き続き、生涯学習審議会委員を担当させていただく。前期は全国各地の様々な団体からヒアリングをさせていただき、よい経験ができた。宮城県では、多様な大人達がつながっている様子や若者の行動や考え方が変わり、成長していく姿を見ることができた。地域課題を解決するための学習と考えるとハードルが高くなるかもしれない。宮城県の事例では、地域課題を解決しようと若者が頑張っているのではなく、地域に根ざして皆で一緒に暮らしていこうと考えて活動している印象を受けた。若者がそれぞれの地域に根ざした生活をできるような支援が必要であると思う。

会長　私は、まちづくりの領域から、広い意味での生涯学習に関わってきた。この場には、学校との関わりで地域と学校の接点がある方、地域づくりに直接係わっている方など様々な方が集まっている。様々な視点から今までにない新しい動きが提案できればいいと思う。

　これまでの皆様の話には大切なキーワードがいくつかあった。例えば「家庭の役割」では、体験活動を積極的にすることができる親とあまり関心がない、または興味があるが家庭事情で参加させることができない親とのギャップをどのように埋めていくのかという問題がある。ここでは、行政の役割がとても大きくなるだろう。また、「学校と社会の関わり」についての議論も重要であると思うので、このことについても扱っていければいい。最近の２０歳前後の若者は、「社会」の意味をよくわかっていない印象を受ける。半径２、３メートル程度の友だち付き合い、もしくはインターネットのニュースで読んだことのどちらかが中心で、地域社会や人と人とのつながり及びコミュニティという概念がものすごく欠けていると思う。できればこのような若者を地域活動に参加させて地域住民との関わりを持たせたい。

会長　本会議の案件はこれで終了となる。各委員から情報提供などがないか。それでは、今後のスケジールについて事務局から説明をしていただきたい。

事務局より、今後のスケジュールについて説明。

（２）そ の 他

特になし。

７　閉 会

（内容省略）